

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

ムロアジ類

学名 *Decapterus* spp.

系群名(海域) (東シナ海)

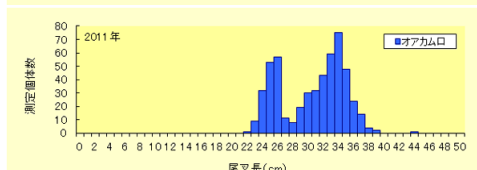
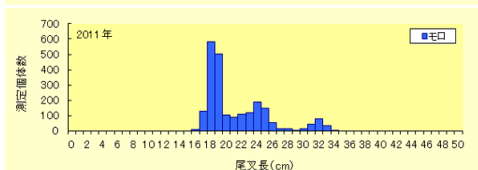
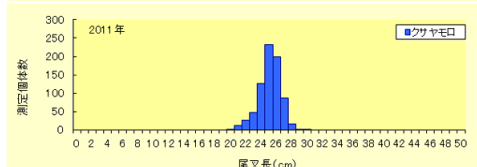
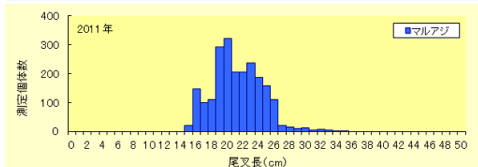
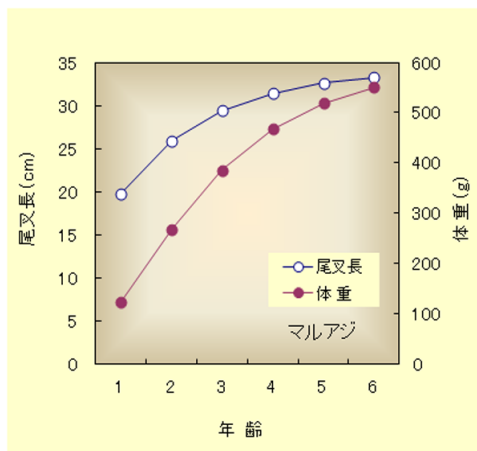
担当水研 西海区水産研究所



写真はマルアジ

生物学的特性

寿命: 最高齢はマルアジで6歳、クサヤモロ8歳、モロで5歳、オアカムロで7歳、アカアジで10歳
成熟開始年齢: マルアジ、モロ、クサヤモロでは2歳
産卵期・産卵場: 春～夏季に産卵する魚種が多い、東シナ海の広い範囲で産卵するが魚種により異なる
索餌期・索餌場: 不明
食性: マルアジでは稚魚期にカイアシ類や枝角類を、成魚期にカイアシ類、オキアミ類、小型魚類を捕食
捕食者: 大型魚類や哺乳類

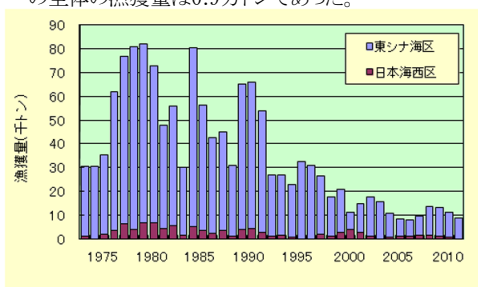


漁業の特徴

大中型まき網および中・小型まき網により漁獲され、2011年は大中型まき網が漁獲量の約6割で、残りの多くを中・小型まき網が占めた。東シナ海で多く漁獲されるムロアジ類は、マルアジ、ムロアジ、モロ、クサヤモロ、オアカムロ、アカアジである。この海域におけるムロアジ類の漁獲量を県別でみると、長崎県と鹿児島県が多い。中国などの外国漁船もムロアジ類を多く漁獲しているとみられる。

漁獲の動向

東シナ海区の漁獲量は1978年の7.7万トン进行ピークに一度減少したもの、1984年に7.5万トンを超える漁獲量があった。以後減少を続け、2000年には1万トンを下回った。2011年は0.8万トンであった。日本海西区の漁獲量は近年1,000トン前後で推移しており、2011年は520トンであった。日本海北区の2011年の漁獲量は26トンであった。2011年の全体の漁獲量は0.9万トンであった。

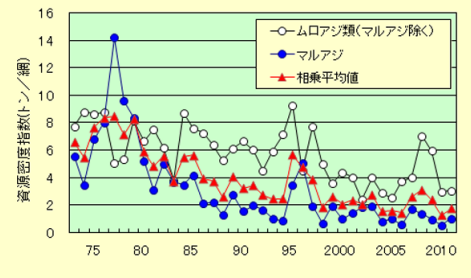
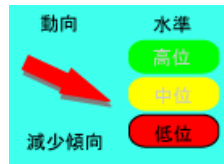


資源評価法

ムロアジ類には複数の種が含まれており、それぞれの種について資源量推定を行うには十分なデータがない。ここでは単一の漁業種類としてはムロアジ類漁獲の大きな割合を占める大中型まき網の資源密度指数から資源水準と動向を判断した。大中型まき網ではマルアジとその他のムロアジ類に分けて漁獲情報の収集がされているため、ムロアジ類およびマルアジの資源密度指数のそれぞれの値の相乗平均値を資源量の指標値とした。

資源状態

大中型まき網のマルアジの資源密度指数は増減を繰り返しながらも長期的には減少傾向で推移しており、近年では低い水準にある。マルアジを除くムロアジ類の資源密度指数は1990年代前半までは増減を繰り返しながら推移してきたが、1990年代後半に減少し、2000年代前半にかけて低い水準となった。その後、2006～2008年にかけて増加傾向が認められたが、2009・2010年には再び減少した。2011年は2010年から微増した。マルアジおよびムロアジ類（マルアジ除く）の資源密度指数の相乗平均値は過去約40年間でみると低い水準にあり、最近5年間（2007～2011年）では減少傾向で推移している。



管理方策

ムロアジ類は複数の魚種が含まれるため、本来ならば、種別にABClimitを設定すべきだが、現状では魚種別の漁獲量も明らかでなく、各魚種の資源量の変動を追うのは困難である。また、外国漁船による漁獲状況も不明な点が多い。そのため、現状では、我が国におけるムロアジ類としての資源量指標値に合わせて漁獲することが現実的であろう。全体としてみると、資源量指標値の水準は低位であり、動向も減少傾向を示しているため、現状の漁獲より抑えることが望ましい。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	45百トン	$0.6 \cdot C_{2011} \cdot 0.83$	—	—
ABCTarget	36百トン	$0.8 \cdot 0.6 \cdot C_{2011} \cdot 0.83$	—	—

- 平成24年度ABC算定規則が改正され、ABCは $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot C_t \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bとlは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である

資源評価のまとめ

- ムロアジ類には複数種が含まれ、マルアジを除くその他の種について種別の資源指標は不明である
- 資源水準は低位で、動向は減少傾向である

管理方策のまとめ

- 現状では種毎の漁獲量も把握できないので、ムロアジ類としての資源量指標値にあわせて漁獲することが現実的である
- 東シナ海における資源状態を正確に把握するには、関係国間の協力が必要である

執筆者: 安田十也・依田真里

資源評価は毎年更新されます。